

印度佛教美術の發達

— 圖像學的試稿 —

日本に來て、印度學者は、印度研究が頗る行互つてゐるのを感じるのである。唯、此の國には色々の由來と結んで、極東佛教美術の名作が集つてゐるのを見るのみではなく、何處に行つても、此國程印度佛教美術の嗜好家鑑識家に出會ふ事はないのである。日本人は、稀なる印度古代の跡を辿り、その大樹の根を正しく捕へて、今日まで、其の寺院や博物館に藏せられた至寶にその花を咲かせて居る。従つて、之に依つて、正に誇りとする佛教美術の過去に、出來るだけ遠く溯つて見る事が、何時でも出來るのである。

こゝで試みようとする所は、文獻と遺物とで、今日知られてゐる事實に就いて忠實に叙述するにある。種々なる理論は一先づ別にし度い思ふ。

元來佛教では、外界の非常住、非實在の觀念から、内面的信仰を尊重する。